

保育者養成における野外教育

高野 牧子¹⁾ 打越みゆき²⁾ 山田 英美³⁾

要 旨

保育者養成校における野外教育の現状を検討することを目的とし、アンケート調査を行った。調査対象は山梨県内大学生 91 名と都内大学生 101 名である。都市部出身学生が多い都内大学生は自然で遊んだ経験が浅く、大学での野外教育も公園調査のみで、幼児への自然教育についても不安や疑問を抱く学生が多い。地方出身学生が多い山梨県内の大学生は、自然で遊んだ経験が豊富で、大学の授業でも植物栽培やキャンプなど多様な経験を積み、幼児への自然教育にも関心が高かった。養成機関における格差が明確になり、積極的な野外教育で次世代の子どもたちに自然教育を実践する力を養う必要があると考えられる。

キーワード：保育者養成 自然遊び経験 カリキュラム 野外教育

1. はじめに

幼児教育における自然教育は、幼稚園教育要領においては主に領域「環境」の中で取り扱われている。ねらいでは「(1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心を持つ」とし、その内容は「(1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。(4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」と、幼児の生活の中で自然と十分に関わり、気づきや関心をもって活動することを勧めている。

飯田(2004)は野外教育では、社会力を育み、感動体験や成功体験によって、「自己概念の中でも達成動機(自分の能力を最大限にのばせるようないろいろなことをやってみたい)と努力主義(一度自分で決めたことは途中いやになってもやり通すよう努力する)に顕著な効果が認められる」とその重要性を述べている。また、平野(2004)も自然体験の意義を「①活発な身体運動の機会 ②人間同士のコミュニケーションの機会 ③自然や

社会での直接体験の機会 ④創造、工夫の機会など」を提供すると指摘している。川村(2009)は、長年の子どもキャンプの実績をふまえ、野外での体験活動を精神力と関連して、「心を強くすること」と「心を柔らかくすること」の2点を挙げている。つまり、共通に指摘されている点として野外教育は、自然を感じ、自然から学び、自ら努力して頑張る姿勢、こうした生きる力の源となる貴重な体験学習の場であるといえよう。幼児を対象とした自然活動の実践報告や研究は活発にされている。その一方、保育者養成における野外教育に関する報告は少ない。山根ら(2010)が大学内にビオトープを設置して、積極的に野外活動を実施し、効果をあげていることを報告し、興味深い。しかし、筆者自身、屋外での授業中にアリの怖がる学生たちに困惑した経験がある。実際に学生自身も自然体験が希薄化していることが危惧される。

そこで、本研究の目的は、保育者志望の学生の野外体験、自然に関するあそび経験や生き物への意識などを調査し、保育者養成機関における野外教育、自然教育に関する現状と課題を検討することとする。

(所 属)

1) 山梨県立大学

2) 星美学園短期大学

3) 身延山大学

2. 研究方法

アンケート調査を実施した。調査対象は都内 S 短期大学生 101 名と山梨県内 Y 大学生 91 名である。学年等の対象者の詳細は表 1 に示す。

表 1 調査対象

大学名	学年	N
S 大学	1 年	26
S 大学	2 年	44
S 大学	専攻科	31
小計		101
Y 大学	1 年	25
Y 大学	2 年	22
Y 大学	3 年	17
Y 大学	4 年	27
小計		91
全対象者数		192

都内 S 短期大学（以下 S 大学）は、都内の住宅地域、幼稚園から短大まで同じ敷地内にあり、比較的植栽も多い。屋外には全天候型テニスコート 2 面、高校と共有のテニスコート 4 面がある。学生は約 95% が外部受験生であり、都内とその近郊からの通学生が多い。

これに対し、Y 大学（山梨県）は、甲府市内の住宅地域に大学単独で設置、敷地内の図書館、体育館付近に桜並木がある。屋外にはグラウンド、テニスコート 2 面の他、学科で畑を保有する。学生は全国から入学しており、下宿生も多い。

質問項目は、回答者について Q1 年齢、性別、Q2 きょうだい数と内訳、Q3 幼児期から小学校低学年までの居住地域（都道府県）と Q4 その環境の 4 項目、幼少期の遊びについては Q5 遊び場所^{*1}（選択肢から 3 つ順位をつけて選択）と Q6 遊び仲間（選択肢：①同年齢の友だち、②異年齢の友だち、③きょうだい、④親や祖父母、⑤一人より 1 つ選択）とした。

Q7 自然遊びについては、以下の質問項目に対し、とてもよく遊んだ 4 点、遊んだ 3 点、あまり遊ばない 2 点、遊んだことがない 1 点の中から選択した。項目は被験者以外の同年代の学生 5 名より、事前に聴き取り調査をした結果より、さまざまな地域でも多くの学生が一般的に行っている可能性がある項目を選択した。項目は「①花の蜜を

吸う②花で色水を作る③どんぐりごまを作る④草笛を吹く⑤虫取りをする⑥アリの巣にいたずらをする⑦魚釣りやザリガニを捕る⑧木に登る⑨泥んこで遊ぶ⑩だんご虫を集める」の 10 項目であり、結果処理の方法は 10 項目の得点を合計し、各学生の自然遊びの経験値とした。

また Q8 生き物への親和度については、次の生き物について、「該当する番号全てに○をつけてください」とし、今でも素手で触れる：4 点、捕ったり、飼ったりした：3 点、少し怖い：2 点、触れたくない・逃げる・避ける：1 点とした。具体的な生き物として、Q7 と同様に聴き取り調査から、次の 16 項目を挙げた。①アリ②カタツムリ③ミミズ④クモ⑤モンシロチョウ⑥モンシロチョウの幼虫（あおむし）⑦カブトムシ⑧カブトムシの幼虫⑨てんとう虫⑩バッタ⑪ザリガニ⑫ヘビ⑬ナメクジ⑭トカゲ⑮アメンボ⑯だんご虫である。以上 16 項目の得点を合計し、各学生の生き物への親和度とした。

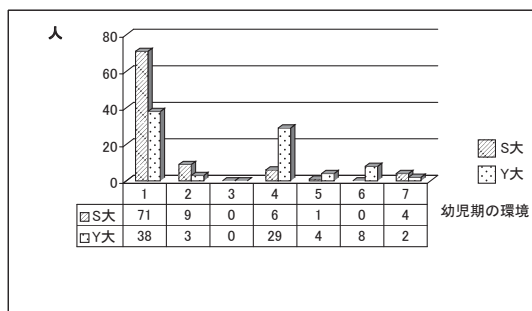
野外教育については Q9 キャンプ経験の有無 Q10 キャンプ経験のある方のみ回数 Q11 大学の授業での野外教育、自然教育の機会の有無 Q12 Q11 で機会がある方はその内容を、ない方は参加したい内容を次の 6 項目より複数回答した。項目は①植物栽培②生物観察③キャンプ④山登り・ハイキング⑤海や川での活動⑥その他（自由記述）であった。Q13 では Q11 で機会があると回答した者へ印象に残ったことを自由記述させた。さらに、Q14 では将来、保育現場に就職したら、子どもたちと自然を利用した遊びを行いたいのか、次の 5 項目より選択した。項目は①積極的に実践したい②自然環境があり、機会があれば、実践したい③実践したいが、遊び方がわからない④あまり実践したくない⑤その他（ ）とした。Q15 は保育者養成における野外教育、自然教育について意見や要望を自由記述させた。

3. 結果

(1) 成育環境

幼児期の居住場所上位は、S 大では東京 38 人、埼玉 33 人、千葉 10 人の他、神奈川、群馬、茨城

など、関東地方が大多数であった。これに対し、Y大の上位は山梨36人、長野12人、静岡10人の他、新潟、富山、鹿児島、北海道など全国から進学している。成育環境(図1)は、両大学共に住宅街が最も多いが、S大の71名(70.3%)に対し、Y大は38名(41.8%)に留まり、農業中心の成育環境も29名(31.9%)、山あいも8名(8.8%)、海に近い4名(4.4%)と自然環境豊かな成育環境の学生も4割以上いる。きょうだい数については、どちらの大学も2人または3人きょうだいが多い数であり、差は認められない。



1. 住宅街など、住宅が中心
2. スーパーや商店街、ショッピング関係が中心
3. 大きな工場や町工場など、工業が中心
4. 水田や畑、果樹園など農業が中心
5. 海に近い
6. 山が近い、山あい
7. その他

図1 幼児期の成育環境

(2) あそび空間とあそび仲間

幼児期のあそび空間(表2)として、1位にS大は遊具スペースを選択する学生が最も多く、Y大はオープンスペースを選択した学生が最も多かった。この2つのスペースはS大Y大共に選択する学生が多かった。また、図2に示したように、自然を1位に選択した学生はY大では17名(18.7%)だったのに対し、S大では6名(5.9%)と少なく、自然を2位に選んだ学生はY大14名(15.4%)に対し、S大はわずか3名(3.0%)であり、顕著な差が認められた。

あそび仲間では、S大が同年齢の同じクラスの友だち45名(44.6%)が最も多かったのに対し、Y大は異年齢を含む近所の友だち42名(46.2%)を占めた。きょうだい数に差がないにも関わらず、Y大はあそび仲間がきょうだいである者も15名(16.5%)であり、Y大は異年齢で遊ぶ経験が多いと考えられる。

表2 幼児期のあそび空間

	S大			Y大		
	1位	2位	3位	1位	2位	3位
1. 自然(山・川・海・田畑など)	6	3	15	17	14	11
2. オープンスペース(広場・空き地・校庭)	27	33	14	32	25	13
3. アジトスペース(秘密基地など)	2	6	14	2	3	12
4. アナーキスペース(資材置き場、城跡など)	0	0	0	1	0	0
5. 道路	12	11	0	8	14	15
6. 遊具スペース(児童遊園、遊具公園など)	38	27	17	19	21	17
7. 室内	14	16	27	12	14	23

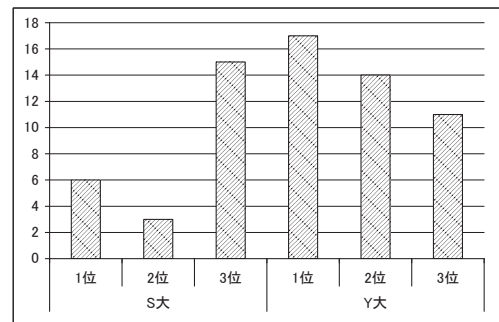


図2 あそび空間に自然を選択した人数比較

(3) 自然遊び体験と生き物への親和度

幼児期の自然遊び体験の経験得点(図3)では、平均すると10項目全てで「とてもよく遊んだ」「遊んだ」を付けた学生は30点以上の高得点となる。S大は30点以上の学生が40%程度であったのに対し、Y大は50%を占めたが、大学間で統計的に有意な差は認められなかった。

一方、生き物への親和度(図4)について大学間でt検定を行ったところ、有意な差がみられた(t=4.53, df=190, p<.05)。S大生は低得点群に偏り、Y大学生は高得点者もあり、大学間での差は大きい。

(4) キャンプ経験

キャンプ経験については、あると回答した者が

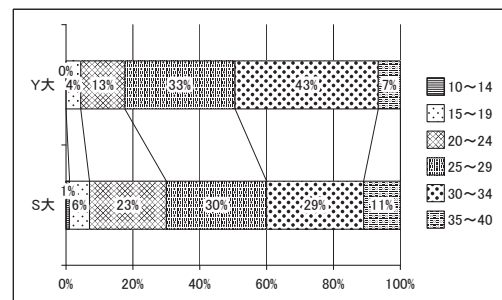


図3 幼児期の自然あそび体験の経験得点

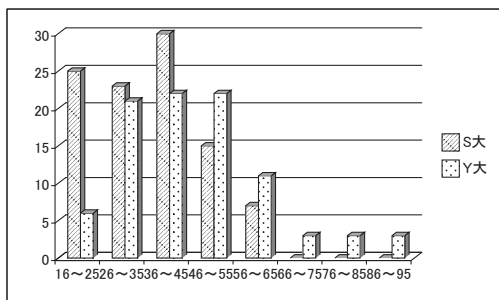


図4 生き物への親和度

S大は73%、平均2.1回、Y大が77%、1.9回とほぼ同程度の結果を得た。

(5) 大学カリキュラムの中での自然教育

S大学の自然教育は「体育実技」の中で、ウォークラリーとして大学から2駅先の公園をゴール地点とし、途中、地域名所5ヵ所を巡る活動と、「子どもの遊び」の中で公園調査の実施である。都内の自然環境が少ない中で工夫した取り組みであるが、2科目2コマに限られている。Q14の印象に残ったこととして「久しぶりの公園で、子どもの目線になって遊ぶことができ、遊具の高さ、配置など、とても考えて作られていることが分かった」「自然のめぐみにふれたこと」などを挙げている。

Y大学は、5科目で自然に関わる教育が行われている。「自然Ⅰ・Ⅱ」では学内の実習用畑で植物栽培をし、「保育内容(健康)」では公園調査、「身体表現演習」では自然の中で表現活動、また宿泊研修の「総合演習」では、自然を使った造形表現や音楽表現を取り入れる場合もある。特に「保育内容(環境)」ではキャンプ、ラフティング、屋外料理など、多様なプログラムが組まれている。担当する講師がつなぎ役となり、近隣大学の豊富な野外教育プログラムを提供いただき、Y大の学生も参加させていただいている。こうした連携により、多様なプログラムを体験することが可能となっている。

学生の印象に残ったこととして、植物栽培では「草を食べたこと！ 自然の授業で食べられる草を教わった時！」「少人数で濃い体験ができた。自分たちで種から育て、育っていく過程も見て、作物を育てる楽しみや収穫する嬉しさを知ることができた。ありがたさも知った」などが記された。

キャンプでは「山登りをしたときの、おいしい空気ときれいな景色。大変だったけど登ったときの達成感・満足感」「ダイヤモンド富士を見るキャンプで、寒くて夜眠れなかったこと」、ラフティングでは、「ラフティングで川下り、8mのがけから大ジャンプ、西沢渓谷の頂上まで登った」など、特に高い崖から川へ飛び込んだこと(写真1)が多く記述され、日常では味わえない強烈な自然体験を挙げている。「普段の生活では体験できないことを、チームで協力して行い、自然の面白さ実感しつつ、よりチームワークが深まったこと」など、野外教育の体験によって実感した効果を記述している。体を使った体験が深く大きな感動につながっていると考えられる。

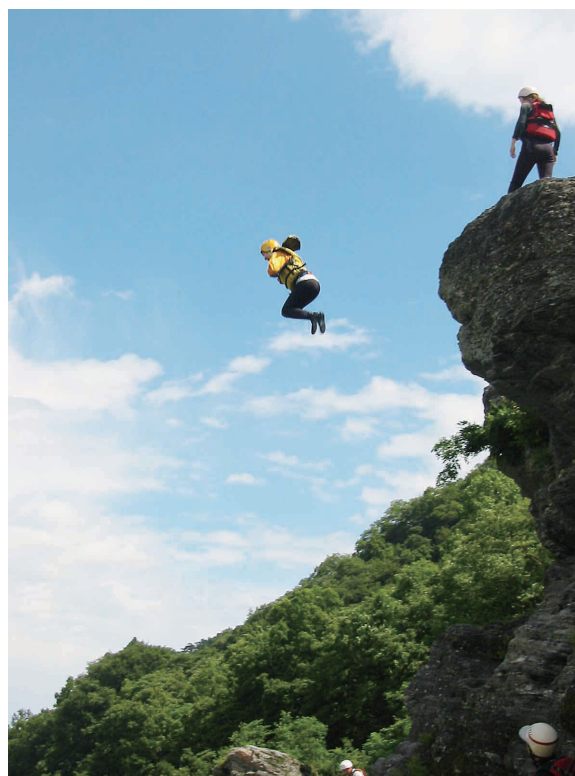


写真1 自己決定で崖から跳ぶ
(写真提供 川村研究室)

またQ14「保育現場に就職したら、子どもたちと自然を利用した遊びを行いたいのか？」に対し、大学間でt検定を行ったところ、有意な差が認められた(t=2.24, df=188, p<.05)。S大生が積極的に実践したいと回答した者が約半数だったのに対し、Y大生は67.8%と多かった(図5・6)。S大も機会があれば実践と回答する学生も43.0%お

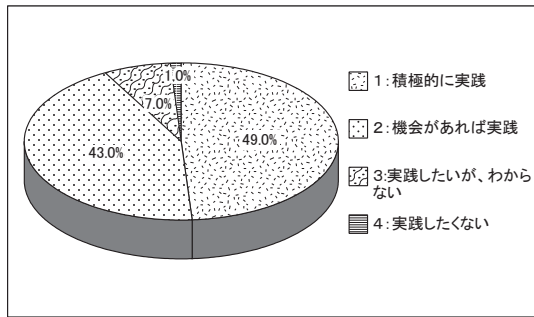


図5 子どもとの自然遊びの実践 S大

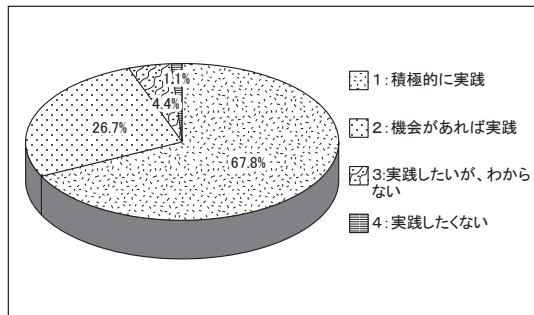


図6 子どもとの自然遊びの実践 Y大

表3 相 関 行 列

	平均値	標準偏差	相関係数				
			1	2	3	4	5
1 生き物親和度	40.65	15.559	1	-	-	-	-
2 自然遊び経験	28.11	5.144	.388**	1	-	-	-
3 キャンプ経験	.75	.434	.055	.001	1	-	-
4 大学授業経験	.41	.493	.112	.073	.178*	1	-
5 自然遊び実践	3.50	.657	.345**	.262**	-.140	.085	1

* p<.05 ** p<.001

り、次世代の子どもたちと自然を利用した遊びを行いたい気持ちはあると推測される。

生き物の親和度、自然遊び経験、キャンプ経験、大学授業経験、子どもたちとの自然遊び実践の各項目について、相関分析を行い、表3の結果が得られた。自然遊び実践に対し、生き物の親和度と自然遊び経験に相関が認められた。つまり、生き物への親和度や自然遊び経験は、子どもたちとの自然遊びを積極的に実践したいと考えることと関係性があることが認められる。

S大の学生の自由記述でも「子どもたちが自然に触れることは、とても大切であると思います。そのためにも、保育者が自然に興味を持つことが大切だと思います!」「自然って大切だと思います。積極的に取り入れたいです」など、自然教育の重要性を指摘しながらも、「自然の少ない都会

でどのように子ども達に自然を見せてあげられますか?」「自然とかかわって遊びたいけど、どんなふうに遊んだらよいか分からない」「虫が苦手な場合はどう接すれば良いのですか」など、体験不足からくる不安や戸惑いが多く記述されていた。

一方、Y大の学生は「自然からはたくさんしたこと(命の大切さや、遊ぶ楽しさ)を学べるし、又、自然の中でしか学べないことも多くあると思うので積極的にそういった教育をしていく必要がある」「自然から学べることがたくさんあると思います。いのちや、自然の摂理、美しさ、厳しさ等…言葉では言い表せないような学びを得ることができると思うので、ぜひ積極的に教育と自然をつなげて、子どもたちにとって身近な素材として使えるように私自身、配慮していきたいです」と、自然教育の重要性を認識している。さらに、「保育者自身が自然を使っての遊びを経験しなければ、子どもたちに伝えていくことはできないと思います」「子どもたちと一緒にキャンプなどの体験ができる機会があればしてみたい」「子どもたちと、自然を利用した遊びを行うためには、それなりの知識を持っている必要があると思うので、しっかりと学べる機会があると嬉しいです」など、大学での野外教育の必要性を実感する記述が多く得られた。

5. まとめ

都市部出身学生が多い都内S大学生は自然で遊んだ経験が浅く、大学での野外教育も公園めぐりのみで、将来、保育者として幼児への自然教育も機会があれば実施したいが、具体的な方法が分からないといった不安も多い。

地方出身学生が多いY大学生は自然で遊んだ経験が豊富で、大学の授業でも植物栽培やキャンプなど多様な経験を積み、幼児への自然教育も積極的に実施したい学生が7割近い。

養成機関における格差が明確になり、都市部の自然が少ない環境で育った学生に対し、大学でのより積極的な野外教育の機会が望まれる。多くの保育者養成の単科大学では、野外教育の必要性を認めながらも、実践することは指導者や環境の面

から、難しい状況にある。

しかしながら、自然環境が乏しい都内近郊でこそ、保育者養成としての野外教育は重要な学習機会である。Y 大学は地域の他大学の野外教育の機会を利用させていただきながら、非常に多様な野外教育を実践することができている。Y 大学のような大学間連携による野外教育推進の方策も今後、検討していくことが出来るのではないだろうか。保育者養成での積極的な野外教育で次世代の子どもたちに自然教育を実践する力を養っていききたい。

註

- * 1 遊び場所については、仙田満 (1984) のあそび空間の 6 分類のに基づき、
1. 自然 (山・川・海・田畑など) 2. オープンスペース (広場・空き地・校庭) 3. アジトスペース (秘密基地など) 4. アンダーキースペース (資材置き場、城跡など) 5. 道路 6. 遊具スペース (児童遊園、遊具公園など) に 7. 室内 を加え、7 項目とした。

【文 献】

- 飯田稔 (2004) : 子どもに何故野外教育が必要か, 日本発育発達学会編『子どもと発育発達』vol.2 No.2, pp.80-83
平野吉直 (2004) : 子どもと自然環境, 日本発育発達学会編『子どもと発育発達』vol.2 No.2, pp.84-87
川村協平 (2009) 「キャンプ生活とたくましさ」『教育と医学』vol.57, no.10, pp.974-983
山根一晃 他 (2010) 野外教育施設 (東山ビオトープ) を活用した保育者養成に関する研究 鎌倉女子大学学術研究所報 10, pp.71-82,

The outdoor education curriculum for the students of teacher-training course of child care and education

TAKANO Makiko, UCHIKOSHI Miyuki, YAMADA Hidemi

Abstract

The purpose of this paper was to survey the key factors to improve the outdoor education curriculum for the students of teacher-training course of child care and education. The questionnaire sheets were collected by both 101 students of a university in the Tokyo Metropolitan area and 91 students in the Yamanashi Prefecture. The students in Tokyo area, many of them are coming from urban area, had less experience for their own outdoor playing in nature and provided classes were just an observation of play yard for children. They had many questions and fear to practice outdoor education to early children. On the contrary, the students in Yamanashi, many of them are from rural, had more experience in nature, and took several and various courses such as plants cultivation and camping in the university. They were more interested in the outdoor education for early children. The survey reveals the difference between two organizations. Active improvements, such as increase of outdoor experience courses, will be necessary for improve their outdoor education classes for urban university, to encourage their students' practical capabilities.